

2013 年度 FD 研修会

1. FD 研修会

「GPA をめぐる成績評価を考える」

講師：山本 寿（同志社女子大学教授）

司会：新宅 広二（FD 研究員）

日時：2013 年 11 月 28 日（木）14:40～16:10

場所：武蔵大学 8604 教室

●研修会の趣旨

一昨年度まで例年、講演会形式のFD研修会が開催されてきたが、これまでの講演テーマは、個々の教員のFDの視点からのものが多く、成績評価の在り方について、制度的観点から考える機会はほとんどなかったと言える。今回講演いただいた山本先生の講義は、国際比較の観点や統計学的視点から成績評価の在り方に潜む問題点を考えるものであり、これまでにない、新たな視点からFDの課題を考える興味深いものであった。

●講演の内容

0 GPAとは何か

GPAは、大学審議会や中教審答申などが近年重視する厳格で客観的な成績評価を可能にする成績評価の在り方として日本においても肯定的にとらえられ、半数近くの大学で導入されるに至っている。その起源はアメリカの大学で普及した Letter Grade (A, B, C, D, F など) に数値を対応させたものであり、日本で普及している GPA においても、S, A, B, C, D などの評価を基準に、それに0点から4点までの5段階の点数をつけて数値化することが一般的である。

GPAのもう一つの特徴は、全登録科目を算出の対象とし、Grade Point が0のものも計算に加えて加重平均を算出するという計算をしている点で、この場合、修得できた単位の成績が高くても、修得できなかった単位の数が多いと GPA は低くなってしまおうという特徴を持つ。このことは従来の日本の大学の成績評価が修得した単位のみを対象としていた点と大きく異なり、学生に対し科目登録に責任をもたせ、履修の質を保証する効果を持つ一方で、不合格になりやすい科目の履修を敬遠させるなどの影響を与えやすい。

1 一般的な(旧) GPA算出法の不合理性

では、このようなGPAの成績評価に死角はないのであろうか。注意しなければならないのは、GPAの本家とも言うべきアメリカでは、Letter Grade をより細分化し、13段階程度に区分する大学が増えているという事実である。それにもかかわらず日本では5段階におおざっぱに区分された旧来のGPAをそのまま続けているが、それにはどのような問題がありうるだろうか。従来の100点満点の素点での成績評価に対し、GPAでは70点でも79点でも一ケタ目の数値が無視されて同じポイントとなってしまう、粗視化されてしまうという問題点がある。しかも、そのようにして精度を下げた数値をもとにして、平均を算出するという操作をすることは、統計学的な精度に関して大きな問題を孕んでおり、もととなっている素点での成績評価とGPAでの成績評価とを比べてみると、成績が逆転してしまうようなことすら理論的には起こりうる。

2 連続 Grading Scale の考案

では、このような問題を生み出す粗視化を克服するために、どのような工夫が可能であろうか。これを克服する一つの解決策として、山本氏はGPAポイントで成績評価を報告するのではなく、素点で成績評価を行い、60点以上の成績について、たとえば $\text{Grade Point} = (\text{素点} - 55) \div 10$ のような計算式でGPAを算出することを提案する。このような試みは既に一部の大学でも導入されつつある。

3 (新) GPA制度の導入 同志社女子大学

では、このような(新)GPA制度には課題はないのであろうか。山本氏は勤務先である同志社女子大学での議論をもとに、導入時議論となった点を検討している。一つの点は、最高点が、4.5点となってしまうことで、最高点を4点とするアメリカの大学で教育を受けてきた教員からは大きな違和感があることである。

第二の点は、不合格科目も含めた全登録科目を基準にGPAを算出することに対して違和感を感じる教員がいることで、再履修により合格した科目については、過去の不合格の履歴を計算から除いてもかまわないのではないかという意見が出たが、それはGPAという制度を大きく変えてしまうことになるので、一定期間後に登録修正を可能にするという対応がとられることになった。

4 検証：(3学科)新旧GPA差とその要因

では、新GPAがどのような変化をもたらしたのか。同志社女子大学での導入後の検証がここで紹介された。第一の変化は登録したまま受講を放棄する学生が激減したことである。しかし、第二に最高点4.5という独自の点数制度が、留学の際に理解されにくいのではないかと指摘もなされた。ただしこれは、丁寧に留学先に計算方法を説明すればさほど大きな問題とはならないことも判明した。

この点に関連して、そもそも最高点を4とするようなアメリカの基準が果たして「グローバル・スタンダード」と言えるのかどうかと問われることになるが、山本氏は先行研究を紹介しながら、そもそもGPAが、ヨーロッパでは普及していないこと、成績の段階区分も多様であり、最高点も多様であることを指摘している。

第三に、成績分布の上でボリューム・ゾーンである80点が3ではなく2.5になってしまうため、他大学に比べてGPAが低く算出されてしまうのではないかという懸念が出された。調査の結果それほど大きな差はないが、確かにそのような傾向があり、その背景には新旧GPAで点数の重心にズレがあるなど、さまざまな要因が指摘できることがわかった。

5 コメント：科目間難易度差是正の試み

最後に、最近の新たな提案として偏差値によってGPAを表示するという考えについての検討が加えられ、完全な相対評価という考え方が、教員のこれまでの採点方法にあった絶対評価の側面を考えるとときに違和感を与えてしまうのではないかという危惧が指摘された。

●講演を終えて

講演の後、簡単な質疑応答が行われ、個々の教員の採点基準の統一性（Sは10%, Aは20%といった共通の基準を作ることの是非）の問題についてなど様々な質問が出された。今回の講演はGPAの制度的な側面に焦点をあてており、その範囲で、本学のGPAの在り方について今後検討していかなければならない課題を明示する有益なものであったが、質問にもあるように、個々の教員の成績評価の在り方という今回あまり触れられていない側面にも課題は存在する。これらの点についても今後も検討すべき課題として残されていると感じられた。

(文責：河合 康夫)



新 GPA 制度を従来の方式と比較しながら説明

2. FD セミナー

「教職員のための ICT を用いた教材づくり」

講演：米国 IT 系企業 エデュケーション部

司会：新宅 広二 (FD 研究員)

日時：2013 年 11 月 13 日 (水) 16:20-17:50

場所：武蔵大学 6 号館 6103 教室

これまで武蔵大学では、教員の授業改善の FD の研修や講演会などを毎年数多く、著名な方を招聘してきた。今年度は、武蔵大学の FD の方向性を模索する期間を脱し、より教員のためになるような教育ニーズに応えられる研修へのステップアップを目指した。そこで本校 FD 実施委員長を中心に、次のような 2 点にフォーカスして、テーマと招聘する講師人選を決めた。

- 授業運営に役立つもの、またはその関連の課題解決につながるもの
- 全学的に参加できるもの (特に教務課、広報課など)

その結果、FD 項目の ICT (Information and Communication Technology) の活用として、授業や e-Learning など具体的にどのような導入事例があるのか、米国系の IT 企業日本法人の教育担当の方をお招きして、世界的な ICT の教育活用事例について最新情報をお話し頂いた。これまで武蔵大学人文学部研究委員会で、タブレットを使った ICT 活用の教育ツール開発について検討会が開かれていた背景もあり FD 実施委員会と人文学部研究委員会の両主催という形で企画された。

事前に企業本社にて、FD 実施委員長、FD 研究員が FD の講演内容について打合せをした。企業の教育担当者は、国内外の FD 事情に精通しており ICT 全般の入門的な内容から、高度なアプリ開発に関するワークショップに至まで対応が可能であったが、今回武蔵大学では、ICT を使うとどのようなことができるか入門的なところをお話ししてもらうことにした。

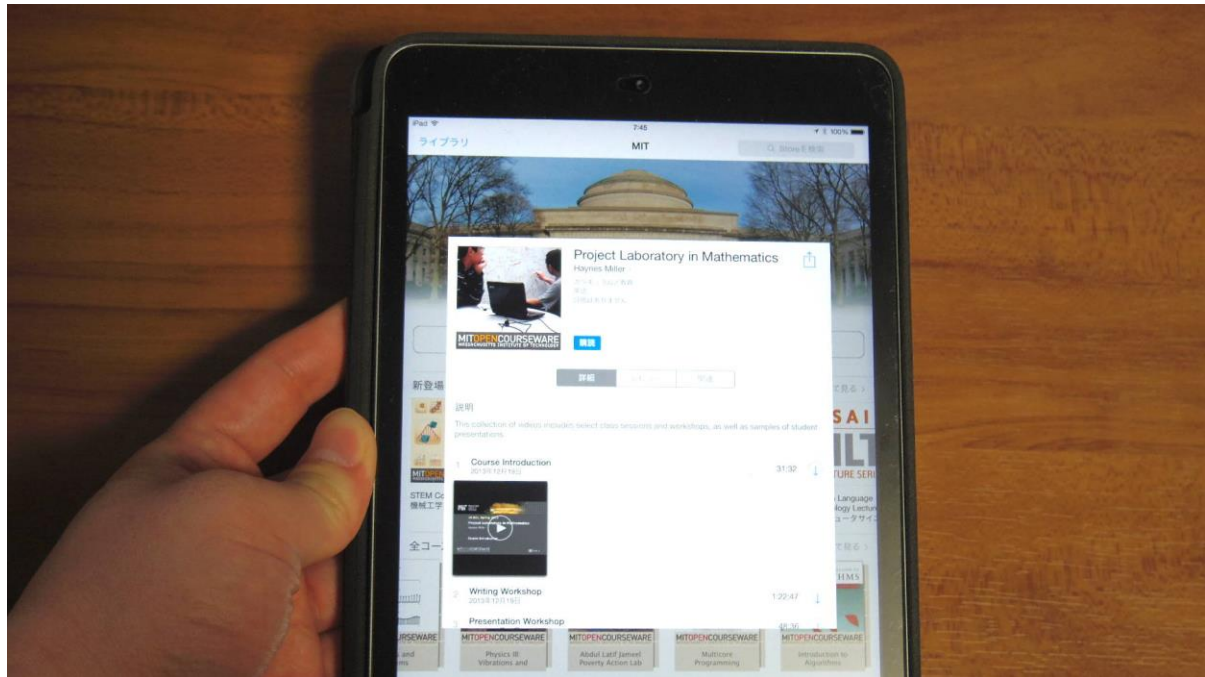
内容は、米国の教育事情から国内の ICT 活用事例などを紹介し、ゼミや教材作りのヒントになりそうな、音声や動画配信が手軽に出来る iTunes U や Podcast の教育的な導入事例の紹介があった。今回の ICT ツールとして特に注目したのは、提案されたのは iTunes U で、最も普及している ICT デバイス (タブレット) を使って、講師が独自の講座を自由に作れるという魅力的なものであった。iTunes U アプリケーションを使えば、講師はアイデアをより効果的な新しい方法で伝えることができ、学生はより夢中になれる豊かな学習体験を持つことができるため、世界 26 ヶ国の幼稚園から大学までの教育機関で利用され注目されている。講座全体を一つの無料アプリケーションで管理が出来る。iTunes U では、学生がビデオやオーディオの講義を再生し、講義の進行に合わせてメモを取ることができる。デジタル教材の本を読んだり、プレゼンテーションを見ることができ、講座の全課題リストを確認し、終わったものにチェックマークをつけていくこともできる。講師がメッセージを送ったり、新しい課題を作成すると、受講者には新しい情報を知らせるプッシュ通知が届けられる。

このようにカスタマイズ性が高く、高度なコンピュータ・プログラミング言語の習得などを一切必要としないことが魅力である。『ゼミの武蔵』をサポートする ICT として、安価 (無料)

で授業の効率を上げたり、学生の主体性を高めるようなものに応用するのに一考の余地はあると思われる。

加えて本講演では ICT の話し以外でもプレゼン力でも有名な企業なので全体を通して見事なプレゼン方法・情報発信力はヒントや刺激を受けたという感想が受講者教員、大学院生などから寄せられた。今後もこのような、幅広い教職員が参加しやすいイベントをFDとして企画することが必要と思われる。

(文責：新宅 広二)



iPad mini で iTunes U アプリケーションを利用

3. FD フォーラム

「学生と共に考える授業改善」

司会：武田 信子 (FD 実施委員)

日時：2014 年 2 月 27 日 (木) 14:40～16:10

場所：武蔵大学 1203 教室

<趣旨と概要>

本年度の FD フォーラムも、学生からの授業改善に関する提案をもとに、学生と教職員とが協働で課題を検討する機会とした。フォーラム当日は、学生 8 名 (登壇者を含む)、教員 14 名、職員 2 名が参加した。なお、本年度の登壇者は以下の通りである。

横田 寛 (経済学部 経営学科 3 年)

津端悠稀 (経済学部 経営学科 2 年)

黒川智貴 (人文学部 英語英米文化学科 3 年)

中川成美 (人文学部 ヨーロッパ文化学科 2 年)

小橋龍人 (人文学部 日本・東アジア文化学科 2 年)

上記登壇者のうち、1 名は昨年度に引き続いての参加である。また社会学部からは、当初参加を予定していた学生による提案の概要と、昨年度登壇した学生から寄せられたその後の活動状況等が、FD 実施委員により紹介された。

本年度のフォーラムにおいて画期的だったのは、学生と教職員との対話がよりスムーズかつ濃密に展開するよう、「ワールドカフェ」というディスカッションの形式を採用した点である。具体的には、会場となった教室にいくつかのディスカッションスペースを設け、参加者は学生・教職員を問わず自由に着席し、そこへ提案を発表し終えた登壇学生が参加するというものである。各ディスカッショングループが少人数で構成されたこともあり、これまで以上に学生・教職員の間で積極的なコミュニケーションが図れたように見受けられた。

<提案の論点>

本年度提案された内容の主な論点は、以下の 3 点に集約できる。

(1) 授業における教員の対応に関するもの

まず講義科目については、出席状況確認のあり方や成績評価基準のあいまいさが指摘された。また、講義・ゼミに共通する要望として、学生が提出したレポートやコメントペーパーへのコメントや添削があげられた。こうした意見は、主に当該授業における学生自身の到達度を知りたいというものであり、それが学生の授業に対するモチベーションにつながる旨が指摘された。

(2) 授業と社会とのかかわりに関するもの

大学での授業と社会実利とのかかわりについては、表現の違いこそあれ本年度の登壇者のほとんどが指摘するところであった。こうした点において、3 学部横断ゼミが学生の間で高く評価され、学びの充実度が高いことがうかがえた。具体的には、社会とのつながりが意識できる

内容のゼミ展開に対する要望があげられる。また、講義・ゼミを問わず、学修の成果をアウトプットする機会を求める声が大きかった。

(3) 語学教育等に関するもの

昨年度引き続き、語学教育に関する提案も寄せられた。具体的には、現行の学部学科間の垣根を超えたクラス展開の可能性が指摘された。また、MCV のあり方について、英語以外の言語によるプログラムへの要望もあげられていた。

<今後の課題>

冒頭にも述べたように、本年度のFDフォーラムでは「ワールドカフェ」によるディスカッションが行われた。武田信子FD実施委員によるフレンドリーな司会進行ともあいまって、各グループとも和やかな雰囲気の中、登壇した学生が臆することなくディスカッションに臨めたようである。それは、学生の発言量は昨年度に比べて圧倒的に多くなっていたことからうかがえる。こうした点において「ワールドカフェ」の導入は、学生と教職員とをある程度ボーダレスなものにすることが可能になったように思われる。本年度は、ディスカッションの時間を40分に設定して行ったが、次年度以降は1時間程度設けてもよいのではないだろうか。

その一方で、「ワールドカフェ」は学生だけでなく、教職員にとってもより発言しやすい環境になっていたとも言える。言い換えれば、学生と同様に教職員の発言量も多くなり、学生がそれを傾聴し感化されてしまう場面があったことも否めない。フォーラムの最後に学生からディスカッションの感想を述べてもらったのであるが、ディスカッションの活発さに比して、学生の感想は一様にやや含みのある消極的なものであった。学生がさらなる充実感を得ることができるようコミュニケーションのあり方とはいかなるものか。本フォーラムの趣旨を鑑みつつ、今後の課題としたい。

(文責：漆澤 その子)



発表した学生の皆さん



教職員を交えたワールドカフェの様子

4. 大学院 FD 懇談会

司会：小川 栄一（FD 実施委員）

日時：2013 年 7 月 30 日（火）13:00～14:30

場所：武蔵大学 88-H 教室

7 月 30 日（火）、猛暑のさなかではあったが、本年度大学院 FD 懇談会が、人文科学研究科博士前期課程 4 名、博士後期課程 2 名、計 6 名の参加を得て行われた。西村実施委員長と小川の司会で進行し、打ち解けた雰囲気の中で院生から自由に意見や要望を出してもらった。その席で大学側参加者から一応の見解を回答し、後日、関連部局で検討した上で、院生に正式な回答を伝えた。

大学院 FD 懇談会は、学部で行っている授業評価アンケートに代替するものとして、昨年度から公式行事として開催されている。本学では基本的に少人数教育の原則から大学院の各授業についても数名の履修者を対象にして密度の高い授業と研究指導を行っている。その反面、学部と同様な授業評価アンケートを行うことが難しくなってしまう。なぜなら、アンケートは誰が書いたものか特定されてしまい、その後の研究指導などに支障の生ずるおそれが生ずるからである。そのために大学院の授業評価アンケートは行わず、その代わりに、院生が自由に要望を言える機会として大学院 FD 懇談会を行っている。今回は院生の参加者がやや少なかったためか、院生たちも初めは緊張気味であったが、次第に硬さも消えて活発なやりとりが行われた。短い時間ではあったが、その内容はきわめて充実していたと思う。

院生たちから出された要望は多岐にわたるが、その主なものを中心に述べる。

まず、院生の切実な要望として授業料の問題が出された。多くの院生は経済的に自立しているが、授業料の負担は大きく、研究を続ける上で困難であることが訴えられた。この問題について学生の要望に充分応えることは難しいが、大学院教育の拡充をめざすためには避けて通れない問題であろう。現在、人文科学研究科において平成 27 年度から大学院の改革を行う予定で検討を重ねているが、それとともに学費見直しを実現できるよう検討中である。

奨学金についても拡充を望む声が強かった。日本学生支援機構の各種奨学金のほか、本学独自の給付奨学金、教育ローンなどの制度を設けてはいるが、院生にとってはまだまだ不十分で、生活が苦しいという訴えがあった。これは社会を上げて取り組むべき課題でもあるが、とりあえず本学の対応として、日本学生支援機構の特別研究員に選ばれた院生にも給付奨学金が支給できるように、関連する規程改正を行っている。

カリキュラムに関連する要望として、大学院にも教職関係の科目を開講してほしいという要望が強く出された。これは時宜を得たものである。大学院では教員を志望する学生が専攻を問わず多い。実際、本学の大学院において専修免許を取得した上で、専門的で高度な指導力をもつ数多くの修了生が活躍している。本学の学部には教職課程が設置され、多彩で豊富な教職関連科目が開かれているが、本学大学院ではこれまで「教職に関する科目」が開かれていなかった。大学院においては専攻それぞれの専門教育に重きをおいてきたからである。しかし、近年の学校教育では多様化し複雑化する社会の現状に対応すべく、教員の高度な専門性や実践的な指導力が求められている。大学院においても教育実践に関する高度な専門知識を教える必要が生じている。このような状況への対応と院生からの要望をふまえて、人文科学研究科では平成 27 年度から教育実践に関する講義・演習を新規開講するとともに、教員志望の院生のために教

育・指導体制を強化する方向で鋭意検討している。

以上、授業料、奨学金、カリキュラムに関する事項についてはいずれも近年中の実現をめざして検討と準備を進めている。その旨を院生に説明して、一定の理解を得ることができたと思う。

その他、授業の時間割が重なった場合の対処、後学期に追加の履修登録を行うこと、教職課程に首都圏以外の教員採用試験の過去問を置くこと、奨学金の告知方法に問題があったこと、図書館やPC教室における私語やサークル活動による騒音、GSルーム設置コピー機の不具合、大学院GSルーム使用の問題、院生室本棚の地震対策、院生室の備品、3号館東側の施錠、など教育環境・設備に関する多くの要望が出された。これらの要望を関係部局に伝達して情報共有を行うとともに、後日、各部局より正式な回答を得て、大学院生に周知した。回答に対する意見が院生側から出されれば第2回めの大学院FD懇談会を行うことを予定してはいたが、特になかったので、了解されたものと理解する。

大学院FD懇談会は、院生と教職員とが直接懇談する機会としてきわめて有意義である。教職員が院生の要望を直接に聞くことによって、院生の状況を把握するとともに、教職員と院生と互いに理解を深め、それが大学院の改革に反映することにつながる。今後もこの会を継続的に実施して、大学院教育の内容や学習環境のさらなる改善につながれば幸いである。

(文責：小川 栄一)



大学院生6名、FD委員(学部長)、FD実施委員及び大学庶務課員が参加した